

D R E A M、夢

三月十四日 土曜日 D R E A M、夢

もう睡眠は充分取ってある。

寝ようとしてもやらねばならぬ生物があり、
また寝る気もない午前六時でござる。

一心に、教科書を黙読する。
ざっと三十八ページ。

「まだか、まだか」と、減るわけでもないのに、
何回も、最後のページを、真ん中を飛ばして開ける。

「ああ、昨日はあんなにも時間があつたのに、
昨日一日中、何気なく、覚えようともせず、
よく、まあ、怠けていたなあ。
もし、ずっと、本を見つめていたら、
もう今頃は、終わっていて、覚えてしまっていて、
まだ、おねんねだったのになあ。」
と、後から、切羽詰まった時になって、心を打つ。

「俺には何と嘆かわしい性質があるのだろう。
当座はぼんやり、あとで、あわてる。
悪い癖だ、大きくなる前に、なおさなくては。」
と、いつもの反省の心がわく。

おばあちゃんが階段を登って来る音がして、
続いて、おばあちゃんの「時報」、
「起きやあ、六時四十分やでえ。」